

# 最弱無敗の神装機竜に 降り立つ者

ナウシズ リン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

機動戦士の名を持つISを操る少年　i f　IS学園に入らず　ヒロインが居なかった　そして　転移　のお話

駄神のボケはひどくなっていた模様……　ガンダムの世界と言いつつ　最弱無敗の神装機竜の世界へと飛ばされた　空谷　実　。　ISの待機形態は　この世界に合わせ　ビームサーベルとなっていた

# 目次

第1話	転移 その場所はどこ？	1
第2話	新たな力？	5
第3話	実の初陣	9
第4話	五年後の帝国	13
第5話	ルクス ハプニングに巻き込	
まれる		18



# 第1話 転移 その場所は？

「……  
???」

「……で？ 神様よ？ 俺をなんでここに呼んだ？」

白く無限に広がる 謎の空間 その中に 少年 空谷 実 と 白い衣装を纏った お爺さんが居た 実はお爺さんを神様と言っていた 実はISの世界へと来る前に この神様と会っていた そして この神様の性で ガンダムの世界へと行けなかったのだ

「なに……もうそろそろ 他の世界へと飛んでもらうのじゃ 間違って あの世界へ飛ばした俺びじやしのお」

そして神様は「ほれ」と言ってみせてくれたのは 綺麗な緑の粒子を撒き散らし 戦うガンダムの姿

「本当に 俺がこの世界に……行けるのか？」

実が疑問に思うのは 仕方がない この神様は前科がある 間違ってISの世界へと飛ばした 前例が……

「……大丈夫じゃよ ほれ さっさとその扉を潜らんかい」

早くいけ早くいけと言わんばかりに 言葉 仕方がないな と言う気持ちで扉を潜っていった

「……あつ……しまったのお また 間違ってしまったわい」  
行つて数分後 扉が違うことに気付いたのだった

「転移後の世界」

「んっ ファアア………よし 無事に転移出来たな……」

何処かの木の下に転移させられたようで 転生も転移も なんか寝ていたような感覚がある 欠伸が出るがまあ良い さて……

「……は………つと」

見晴らしの良い場所に転移したお陰で 一つの“王国”のような物を見かけた  
「……王国？……あの世界にあつたか？ それに軌道エレベーターが見つからない」

実の頭に浮かんだのは 駄神の間違い

「ふ、ふフフ……あの駄神がぁ 次アつたら 覚えテるよお!!」

ここへ飛ばした 駄神への怒りをたぎらす だが居ないやつに怒りを燃やしても意味はない そう思い かなり強い力で拳を作っていた手を下ろす その時 腰にある何かに手をぶつけた

「(? なんだ?)」

腰に目をやると 白い筒状の物が腰に付いていた

「(これは…ビームサーベル!?)」

ガンダムに基本的には付いてある 武装の一つ 一部の機体は付いていないが 何故か 展開もしていないのに ビームサーベルがあるのか謎だった

「何故コレが…」

手にもった瞬間 様々な情報が流れてきた 機体の出し方 この世界について この世界の兵器についてなど

「神装機竜?なんだそりや… それに… こいつ…」

手にもった時に感じた 感覚… それは ISの世界で 最初に使った機体「そうか…:宜しく頼むぜ 相棒!!」

そう言った矢先 王国で爆発が起きた それも かなりの大きさの爆発が「なっ! 何が起きた!?!」

一つの爆発があったあと 空でも爆発のような物が発生していた

「……………戦いか……………」

実は直観的に感じた ISの世界で 散々戦いを行ってきた だから分かるのだ  
「……………じゃあ 参戦でもしますかねえ ストレス発散も含めて」

ビームサーベルを手を持ち 展開するための詠唱を始める

『異世界に君臨する 白き英雄よ 新たな地にて 更なる伝説を産み出せ!!』

………来い…ガンダム!!

今 新しい大地に 白き英雄が 降り立つ

## 第2話 新たな力？

ー起動 ガンダム ブルー ブラスタ―

ー兵装 チェック ……オールグリーン

ースラスタ―容量 ∞ エネルギ―供給率 問題なし エネルギ―容量 ∞

ーVPS装甲 展開 パイパーデュートリオンエンジン 起動

ー…機体の全身に”サイコフレーム”が搭載されました その他 ゼロフレーム  
など

ー…装甲に アブソ―ブシールドの能力が追加されました デイスチャ―ジ 搭載  
されました

ー…さらに……

「ん？ んん?? 俺のガンダムに何が起こった？ こんなヤバイ能力付いてなかったぞ  
？」

展開と同時に あっち（IS世界）で作った AIが兵装などをチェックしていくと  
ありえないようなことが聞こえ始めた

「VPS装甲で実弾無効に近いのにビーム吸収装甲って…

サイコフレームも搭載されたって言ってたな…」

チラリと見ると パイパーナノスキン装甲 追加 EXAMシステム 追加……

おびただしい文字が ずらりと並んでいた 中には

「(サイコシャード!? なんつーもん積んでるんだよこれ!?)」

だが 驚いてる時も自然と投影型キーボードに指を運んでいた 実は片っ端から情報を処理していく 一瞬で消えていく 場面 それを一目見ただけで内容を覚え理解していく おびただしい文字が かなりの勢いで消えていく

「大体 理解した… 駄神の仕業じゃねえ…」

けどなあ…

「貰った物は ありがたく使わせていただく!!」

処理を終わらせた 実は 機体を宙へと浮かす

「(!? 流石に 感覚がまるで違う… あの世界で使ったときとは大違いだ…)」

ビームキャノンやビームランチャー、マイクロミサイルポッド 様々な物を積んでいたが この世界で 駄神以外の神が 寄越した物により 重さを感じない上 化け物みたいな性能を手に入れた

「試すにもってこいだな…あの戦場は」

性能の確かめを戦場でやるつもりなのだが 基本は調節を重ねて 万全の状態でや

るのが良いのだろうか 王国の被害も気になるため スラスターを吹かす

「は、速い 本来のGなら 殺人的な加速を持つていたな…」

スラスターを吹かし 以前とは比べ物にはならない速度を感じていた だが実はI Sの世界へと飛ばした時に G無効化の加護を受けている 体に掛かる負荷は0に等しいのだ 王国まで 少し距離があるため

「もつと…飛ばす！」

王国へ向けてさらに速度を上げて飛んでいった

く王国 上空く

「ハア…ハア…クツッ！」

ギイイン ドゴオオン

漆黒の機体が 数多のワイバーンやドレイクを墮としていく

「へっ 貰ったあ!!」

背後から掛かってきたワイバーンの攻撃を受け、体勢を崩す

「くう…！」

体勢を立て直そうとするが ドレイクの 銃器の攻撃を受け 動きを封じられる

「があっ！」

銃器による攻撃を受けている中 強い衝撃を受ける

「たった1機で この数を相手に出きるかよ さっさと墮ちな!!」

「(しまっ…)」

ズギユ オ オ オ …

黄色い光が 漆黒の機体に襲い掛かっていた ワイバーンを呑み込んでいく

「(何が…)」

漆黒の機体の視線はその黄色い光の元に向いていた 周りに居た ワイバーンやドレイクの視線もだった

その視線先には 蒼い8枚の翼のようなものを持ち 大型の銃器を両手に持って此方を見ている機体があった

## 第3話 実の初陣

アーカディア帝国 上空

「ふう…間に合ったか」

実のバスターライフルによる狙撃、単発ではなく照射での攻撃を 黒い機体に襲い掛かる 機体に直撃させた 直撃した機体は跡形もなく消えていた

「ざっと見て 1800〜2000機位か？」

「ーまあ 黒い機体が幾らか墮としているんだろうけどな…」

そう思いながら 黒い機体に接近する 黒い機体は勿論警戒し こちらに剣先を掛けてくる

「安心しな、俺はお前を撃つ気は無い」

「…安心なんて 出来ませんよ」

「ーまあ、当然か…」

戦闘状態の中で介入してきた奴なんて信じられるわけ無い それもわかっていた上での言葉 ISの世界でそんな事は学んできた

「…怪しい行動や自分を狙ってきたと思っただらその剣で俺を斬れば良い」

「――斬れるかは 分かんないけどな――」

それに斬られるつもりなんて全く無い。それにボイスチェンジャーも使っていないため、その声に籠る思いが多少は伝わったのだろう。剣先を敵の大群に向ける

「……分かりました。ですが、もし変な行動をしたら斬りますからね」

彼方もボイスチェンジャー……いやそんなものは存在しないため、直に声が聞こえる。その声には本気で斬る、という感情があつた

「(年のわりには覚悟があるな。恐ろしい。恐ろしい)いきなりで悪いんだが、あんたとしては どうやって 敵を倒したい?」

手伝うつもりで来たんだし、やり方は、黒い機体の操縦者に任せるとして、返ってきた言葉は

「最小限の被害で終わらせたい」

「――不殺ねえ。機体の両腕と両足を斬り落とせば良いか――」

「見知らぬ、俺を信じてくれて、ありがとよ!」

実はガンダム、ブルーブラスタアのビームサーベルを展開し、システム、ミラーージュコロイド、ゼロシステム、トランザムを発動して、敵陣に突っ込んでいった

ーう わ あ あ あ

次々と悲鳴が上がっていく 横目で見ると さっきの蒼い翼を持つ機体が帝国の機体を次々と墮としていた 姿が見えないな敵は恐怖なのか 動けなくなっていた そこをさっきの機体は両腕と両足を器用に斬り落としていた

「ハアッー」

こちら人も人が死なないように気をつけて攻撃をする 大方僕は1200機ほどだろうか、そのくらい墮として来たが 中には 当たりどころが悪く、酷い傷を負ったものや 命を落とす者もいた

その度に僕は吐き気に襲われていた

『(傷つけたく無かったのに)』

吐き気を我慢して 戦い続けた 自分が この帝国を潰すことを決めたときから 戦う覚悟はしていた けど…

「(人が傷つくとは見たくない!)」 暴食(リロード・オン・ファイヤ)!!」  
神装、暴食(リロード・オン・ファイヤ)を使い敵を墮としていった

「(ゼロ…俺を導いてくれ!)」

ゼロシステムで導きだされる的確な攻撃パターンに沿って攻撃をしていく

敵は 恐怖に囚われたのだろうか 動かない が 敵の中にはそれなりに動ける奴がいる そいつを抑えつつ 撃墜していかねければならない

「(つつても この機体に敵うはずないけどな)」

透明のまま 高速移動をしつつ敵の武器を持つ腕を的確に斬り落とし 敵を無力化する

「まだだ!」

更にスラスターを吹かし 速度を上げていく

「ハアアアア!!」

残り500機ほどの機体は 両腕と両足、スラスター部分を破壊し 地上に落としていった

「戦闘終了だな」

2000機ほど居た機体は 空には居なかった 地上には 両腕と両足がない機竜のみだった

## 第4話 五年後の帝国

アーカディア帝国 上空

「これで良いんだろ？」

黒い機体の操縦者に問いかける 出来る限り殺さず 国に被害を出さないように  
誰も居なさそうな 広場に誘導し 撃墜していたのだから

「……ええ……ありがとうございます……」

操縦者の顔色は優れてはいなかった イノベイダーとしても覚醒している実はある  
程度感情が読み取れるのだ 流れ込んでくる感情は 悲しみが主だった 見て分かる  
のは 実戦はあまり経験がなかったということ

「(初めて人を殺めてしまったか……)」

ISの世界で実は少なからず人を殺めている その時の心境を知っている だが  
だからと言って 易々と声を掛ける事は出来ない 人の心は脆い いても容易く 崩  
れてしまうほどに 自分の言葉で傷付いてしまうかもしれないから

「ーそれにー」

「(見知らぬ俺の言葉は響かないだろうし)」

心の整理が必要だろう。そうしなければ、とても今後戦いになったとき戦えない。その時に、この黒い機体は墮とされる。

「(追っ手が来るかもな…) 俺はさっさと離れるとしようか。……その前に) 黒い機体の操縦者、そう言えば、名前を聞いてなかったな。今度また会うかも知れないからな。名前を覚えてもらえるか?」

大体会ったやつとは何らかの形で再開することが多いのを、実は自覚している。名前を知っていて悪いことはない。

「……ルクス・アーカディアです……」

「ルクス・アーカディア? ……ん? アーカディアだと? 王子様に近い位置の人間か? センサーに表示されるこの場所は“アーカディア帝国”、名前にアーカディアと付くなら、偉いところのやつだろう。」

「(何考えてやってんだか、まあ俺には関係ないけどな) ……ルクス・アーカディアねえ、俺は、空谷、実、だ、今度会ったら、よろしくな。」

ひとまず、名前を覚えて、今は暗い感じの、ルクス・アーカディア、を置いて、量子ワープを使い帝国の外に出ていった。

——そして、5年の時が過ぎ、アーカディア帝国は無くなり、今現在はアティス

マータ新王国　として　榮えていた

そのなかで　最弱無敗と最強が名が街に広がっていた

最弱無敗　相手のスタミナが切れるまで粘り時間切れにする戦いにて無敗を誇っている　ただし最強を除いては無敗なのだ　最強の攻撃に耐えきれず　負けている

最強　最弱無敗が唯一　勝てない相手　隙がなく　一撃一撃がとても重く　素早い  
剣捌きが　様々な相手を苦しめるらしい

その二人の戦いは　王国のコロシウムで機竜を使って行われていた

「うおおおおお!!」

「はああああ!!」

剣と剣がぶつかり合う音が響く　その度にコロシウムに集まった　人々の熱気が高まっていく

「ハアハア」

「どうした?　もう終わりか?　ルクス!!」

「いや、まだですよ　実!!」

再び剣を交える　が

「あまい!　ハアツ!!」

実は強い力でルクスのワイバーンの剣を押し返し　素早く回転斬りを喰らわせた

「うわああああ!!」

ドゴオオン

激しく音をたて 壁に激突する 実はすかさず瞬間移動（イグニッション・ブースト）で近付き 首もとに 剣を当てる

「……これで お前の負けだ ルクス」

「あははは………実は敵わないなあ……」

勝敗が決まったとき コロシアムは大歓声で包まれた

「ふう…… お前の強くなってきてるなあ」

更衣室で実とルクスは着替えていた 先程の戦闘の話をしながら

「勝てる兆しが見えないのに 全く はあ」

ルクスは勝てる兆しが見えなかった 先程の戦闘 ルクスからすれば 嫌みに聞こえるほど

「まっ ” 黒き英雄 ” 様が弱くつちや話になんねえけどな」

” 蒼翼の悪魔 ” が 何を言うんですか」

それぞれの隠している異名を皮肉として言い合う だが 二人のその顔には笑みが

浮かんでいた

「言つてくれるじゃねえかよ ルクス さつさと借金返せよ アイリちゃんが困つてるだろうが お前の体質（恋愛フラグ）対しても困つてるって言うのに」

実は首の黒いチョーカーを指して言う

「ちよ！それは言わない約そ…僕の体質？」

ルクスは自覚の無い 体質（恋愛フラグ）に首を傾げていた

「そうそう 俺とアイリちゃんが困つてるは借金だけじゃねえからな？ どんな体質かは考えろよ？」

「ええ！ ちよつと はぐらかさないでくださいよ！」

実だけではなく 妹のアイリまで迷惑を掛けていた事が気になるルクスは実を追い掛ける が

「今度の大会で俺に勝てたら教えてやるよ 待たなあ！」

足の速い 実に追い付くことなく 逃げられてしまった 置き土産として かなりの大金を置いて

「はあ、借金を返すのを手伝つてくれるのは良いけどさあ」

ー迷惑になつてる事も教えてよ！

ルクスの叫びは 虚しくコロシアムの通路に響いた

## 第5話 ルクス ハプニングに巻き込まれる

アテイスマータ新王国 夜

「待てえええー!!」

「待てつつつてんだらうがあ!!」

「ニア〜ント」

ルクスと実は黒い一匹の猫を追い掛けていた ルクスと実はとある用事で この王国にあるアカデミーに行く途中 猫に大切なポーチを取られたと言う少女に猫の捕らえて ポーチを取り返して欲しいと 頼まれ 今の状況となったのだ だが猫は屋根へ路地裏へと様々などところに逃げ 今は屋根の上を走っている それを追い掛け ルクスと実も屋根の上を走っている

「(チツ! こうなったら) パンツアーアイゼン射出!!」

「ニア アアア !!」

すばしっこい奴を捕らえるためのアイテム パンツアーアイゼン

ソードストライクに搭載されているのを 小型化 アンカーの射出のみに特化した物を作り出して 左腕に着けていたのだ それが功を成し 猫は捕獲…かと思われた

ミシ ミシ …… バキイ！！

「おわ ああ ああ」

「うわ ああ ああ」

二人の重さに 屋根が抜け 建物の中に落ちてしまった 猫は落ちる寸前にアンカーから抜け出し 逃げていった

そして二人が落ちた場所はよりによって女子達が入っている最中の風呂場だった

『き や ああ ああ！！』

実は固い石床へと落ち、ルクスは金髪の子を押し倒す形で落ちていた

「(……やりやがったな……ルクス……) ええ……と す、すまん!! ルクス!」

ミラージュココロイドを発動し 実はその場から逃げ出した その時に ”裏切り者く!!”と叫ぶ声が聞こえたが 無視して走り去った

「ハアハア……ルクスの野郎……巻き込むのは良いが 面倒事になりすぎだろう……」

ひとまず 学園の広い場所に出た実 大きな塔のような物の近くでミラージュココロイドを解除した

「あら? 貴方ね もう一人の侵入者は」

が、水色の美しい長髪の子に見つかった 腰には柄が青いソードデバイスを持っていた

「……捕まえに来たのか？」

「そうね……学園での騒ぎは押さえないもの 大人しく捕まってくれるかしら？」

ソードデバイスに手を掛けながら 問い掛けてくる

「(……次来るときは 監獄的な所行きだな ……学園？ そう言えば学園と言っていたな……もしかしたら) はあ…分かった 分かったから 剣を引き抜こうとしないでくれ」

両手を上に挙げ 降参 の意思を見せる 実は 戦闘をするつもりは無いためもあるが 女の子に傷を負わせてまで逃げるつもりは無いのだ

「あら？ 素直に捕まってくれるのね」

流石に不審な行為と捉えたのか 警戒を強める女子

「…あー…いや 元はこの学園に用があつてな 来てたんだが 親友が問題を引き起こし易くてな このような状況になつてるが それに 君のような美しい女性は傷付たくない」

一瞬キョトンとした女子 そのあと笑みを浮かべ

「ふふ お世辞はいいわよ それに 貴方のような 男は嫌いでは無いから …あと

残念ね 貴方…」

女子はソードデバイスから手を離してくれた

「理解してくれて 助かるよ ……ハア…アイツはどうなったんだか」

『兄さんなら 既に 学園の牢屋に入ってます 実さん』

溜息を吐き ルクス心配をしていると 自分のソードデバイスから声が聞こえてきた 実はその声の主を知っているし心配したルクスの妹

アイリ・アーカディア である

「アイリちゃんか…アイツ もう(牢屋)入ってるとはな ……そうだ！ アイリちゃん 今から来れるか？」

既にルクスは牢屋に入っている情報を知った実… しかしこのままでは ルクスと同じめに合う それだけは避けたいため 実はアイリの力を借りるべく アイリを今いる場所に呼ぶことにした

「今からですか？ ……仕方ありませんね どうせ兄さんに巻き込まれたのでしょうか？」

「ああ その通りだ 皆から変質者とは思われたくないから… つと 場所を言わなきゃな デカイ塔のような所の下に居る えつと…」

視線を先程の女子に向ける

「あんた 名前何て言うんだ？」

実の言葉に一瞬戸惑うも答えてくれた

「：クルルシファー・エインフォルクよ」

「クルルシファー・エインフォルク： よし 覚えた！ 俺は 空谷 実 今度会うかも知れないがよろしくな それでつと：」

再び アイリと回線を繋ぐ

「クルルシファー・エインフォルクさんって分かるか？ その人の近くに居るから待ってるよ」

ひとまず アイリの力を借りれば この危機は回避できる あと

「クルルシファー・エインフォルクさん ひとまずちよつと会いたい人が居るんだけど待っててもらっても良いかな？」

クルルシファーさんに待っててもらえれば いける！

「少しね… 長時間ここに居ると風邪を引きそうだし」

ほんの少しだけ 時間を待っててもらえた 実は 塔に寄り掛かるように座ってアイリを待ち始めた